

自然現象記録媒体としての静岡県沼津の 中近世史料『大平年代記』の特性分析

静岡大学教育学部総合科学教室* 遠藤 恵・小山真人

"Ohira Nendaiki" as a Recording Medium of Natural Phenomena
during the Late 12th to 19th Century in Japan

Megumi ENDO and Masato KOYAMA

Faculty of Education, Shizuoka University
836 Oya, Suruga-ku, Shizuoka 422-8529, Japan

"Ohira Nendaiki" is a chronicle describing the medieval-early modern ages (mainly during the late 12th to 19th century) of a local village near Numazu, central Japan. The chronicle contains many descriptions of natural phenomena occurred there. We counted the number of natural phenomena and the number of characters describing each phenomenon in the chronicle and examined its ability as a recording medium of natural phenomena. The descriptions of the chronicle can be divided into the early (AD1184-1652) and the late (AD1652-1871) periods. Both the total information and the information about natural phenomena are generally richer in the late period. Natural phenomena are 45 records (1317 characters) for the early period and 164 records (5869 characters) for the late period, respectively. They contain 12 records related (or possibly related) to earthquakes and volcanic eruptions, which include the 1707 Hoei eruption of Fuji Volcano and the 1854 Ansei Tokai earthquake. They also include unique descriptions of the 1402 earthquake and the 1779 rumbling/ash-fall events.

Keywords: Ohira Nendaiki, chronicle, Numazu, medieval, early modern, natural phenomena, earthquake, volcanic eruption

§1. はじめに

文献史料にもとづく自然災害史研究においては、各時代における史料自体の欠落期間や、自然現象に対する各史料の記録特性を把握することが重要である(小山, 1999)。この考えに沿って、生島・小山(1999)、田中・小山(2000)、ならびに生島・小山(2006)は、それぞれ六国史、『当代記』、『吾妻鏡』を対象として各史料における歴史情報全体、ならびに自然現象に関する情報量の特徴や時間変化を明らかにすることで、各史料の自然現象記録媒体としての性能と限界を明らかにした。

静岡県沼津市とその周辺は、古来より東海地震や富士山噴火等、数々の自然災害の被害を受けてきた地域である。沼津市東部の狩野川左岸にある大平地区(旧大平村)に伝わる古記録『大平年代記』は、1184～1871年の688年間にわたる同地区の出来事を編年的に記した史料であり、歴史学者によって一定の史料価値が認められている(久保田, 2005)。史

料中には地震・噴火関連記事を含む多くの自然現象・自然災害の記述が見られる。

本研究は、『大平年代記』の総情報量ならびに自然現象に関する情報量・内容の分析を通じて、自然現象に対する『大平年代記』の記録特性を把握した上で、地震・噴火関連記述の内容分析を試みた。なお、本論における西暦日付は、小山(1999)ならびに早川ほか(2005)の勧告に従って、1582年改暦以前についてはユリウス暦で表記する。

§2. 『大平年代記』について

沼津市大平地区(図1)は、静浦山地と狩野川の間
の狭い平野に位置し、狩野川の氾濫による被害をた
びたび受けてきた地域である。

本研究では「沼津市史叢書 7 大平村古記録」(沼
津市教育委員会, 2000年刊)中の『大平年代記』を分
析対象として用いた。その史料解説を参考にして、
『大平年代記』の特徴や出自を以下にまとめた。

『大平年代記』は、沼津市大平地区の出来事を、当
時の政治・社会状況を織り交ぜながら書き綴った史

*〒422-8529 静岡市駿河区大谷 836

mkovama アットマーク ed.shizuoka.ac.jp

料である。四冊之内一～四，四冊之外一～四の全 8 冊からなり，四冊之外四以外の 7 冊は大平地区の片岡家と桃源院に所蔵，四冊之外四は同じく大平地区の綾部家に所蔵されている。その全編を通して，つねに書き手の視点は大平地区にあり，他の地方で起きた事件の情報はわずかしき含まれていない。

大平地区には他に『大平旧事記』，『駿東郡大平邑歳代記』，『大平道の記』等の史料が現存している。また，『大平年代記』，『大平旧事記』ともに，現存しない共通の古記録『古帳』をもとに独自に作成されたとされている。

『大平年代記』の成立年代については，まず四冊之内一～四が，上記の『古帳』をもとに 1652 年頃に作成された後に，四冊之外一～四が順次書き継がれていったと推測されている。なお，四冊之外三と外四の間に 50 年程度の記録欠落があるが，記録者側の事情で執筆作業が途絶えたためらしい。

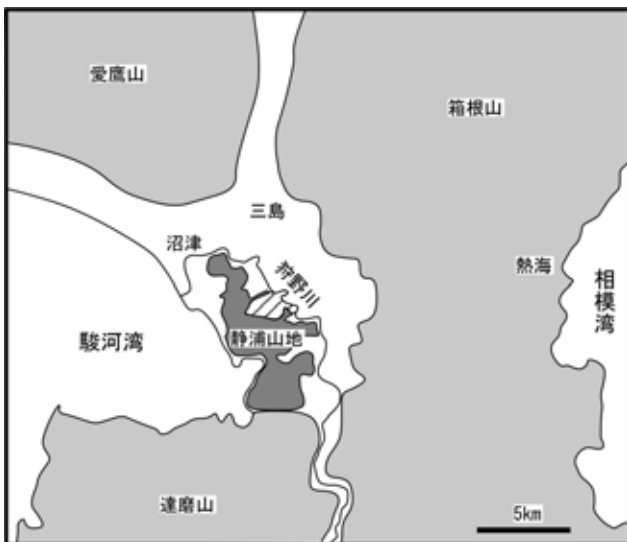


図 1 大平村(現静岡県沼津市大平地区)の位置(斜線部分)。陰影をつけた領域は山地。

§3. 研究方法

『大平年代記』の記録特性を明らかにするために，以下(1)～(3)の3つを定量した。(1)と(3)ではその文字数を，(2)では記録件数をそれぞれカウントした。

(1)総情報量：全記述の文字数

(2)自然現象の記録件数：天候，水害，火事，地震，天文現象などの自然現象記述，ならびにそれらに対する対策や祈願などの記述の件数

(3)自然現象に関する情報量：上記(2)のそれぞれの文字数

次に，自然現象に関する記録を(1)天候(天候によ

る被害や豊作なども含む)，(2)水害，(3)旱魃・日照り，(4)火事，(5)霖雨(長雨)，(6)大風，(7)地震・噴火(候補も含む)，(8)疫病，(9)天文現象，(10)豊作，(11)不作・困窮・飢饉，(12)その他の自然現象(田畑の虫害，動物に関する現象など)，の 12 種類に分類し，それぞれの件数および文字数をカウントした。1 つの記録に 2 種類以上の自然現象記録が含まれている場合は，件数を各種類に 1 件ずつ，現象毎の文字数に分けてカウントした。また，記録が数年にまたがるものについては，その件数は 1 件とした。

§4. 史料の記録特性

表 1 に『大平年代記』の各巻の総記録年数，総情報量，年平均文字数，自然現象記録件数，自然現象記録の総情報量，ならびに自然現象 1 件あたりの平均文字数をまとめた。図 2 には総情報量と自然現象に関する情報量の時間変化を示した。

『大平年代記』の記録年数は 1184 年から 1871 年までの 688 年間にわたり，211 年分の記録欠落期を含み，総情報量は 39530 字，年平均文字数は 57.5 字である。総情報量は，四冊之内一～内四に相当する前半期の 469 年間(1184～1652 年)に少なく(35.1 字/年)，四冊之外一～外四に相当する後半期 219 年間(1652～1871 年)に多い(105.2 字/年)。このことは，前節で述べた『大平年代記』の成立過程(前半期にあたる部分が 1652 年頃に成立した後，後半期にあたる部分が順次書き継がれていった)と関係するとみられる。最も情報量の豊富な時期は四冊之外二に相当する 1711～1736 年の 25 年間(6645 字，平均 265.8 字/年)である。特に情報量の多い年は 1718 年(1356 字)と 1724 年(2025 字)である。1718 年は知行高について，1724 年は土地証文についての記述が主であった。また，この 2 年はともに「外二」に含まれている。

『大平年代記』に含まれる自然現象記録は全記録の 18%にあたる 7186 字(209 件)であり，1 件あたりの平均文字数は 34.4 字である。自然現象記録は，総情報量と同じく，前半期に少なく(45 件 1317 字)，後半期に多い(164 件 5869 字)。自然現象記述の全体に占める割合は前半期が低く(字数で 8%)，後半期が高い(字数で 25%)。特に情報量の多い年は 1723 年(252 字)，1770 年(490 字)，1779 年(395 字)である。その記述内容は，1723 年は霖雨・早ばつ・雨乞い，1770 年は皆既日食・流星等の天文現象，1779 年は霖雨・水害・震動等がそれぞれ主であった。

表1 『大平年代記』の構成と各巻の情報量のまとめ

巻番号と記録年代	総記録年数(年)	総情報量(文字)	平均字数/年	自然現象記録件数	自然現象記録の総情報量	自然現象記録1件あたりの平均字数
「四冊之内一」 元暦元年(1184)～応永二十年(1413)	230	3735	16.2	13	426	32.8
「四冊之内二」 応永二十一年(1414)～永禄十二年(1569)	156	5350	34.3	17	543	31.9
「四冊之内三」 元亀元年(1570)～慶長十九年(1614)	45	4475	99.4	8	206	25.8
「四冊之内四」 元和元年(1615)～慶安五年(1652)	38	2924	76.9	7	142	20.3
「四冊之外一」 承応元年(1652)～宝永七年(1710)	58	5381	92.8	38	1107	29.1
「四冊之外二」 正徳元年(1711)～享保二十一年(1736)	25	6645	265.8	14	649	46.4
「四冊之外三」 元文元年(1736)～文政十年(1827)	92	6503	70.1	49	2267	46.3
「四冊之外四」 文政十一年(1828)～明治四年(1871)	44	4517	102.7	63	1846	29.3
合計・平均値	688	39530	57.5	209	7186	34.4

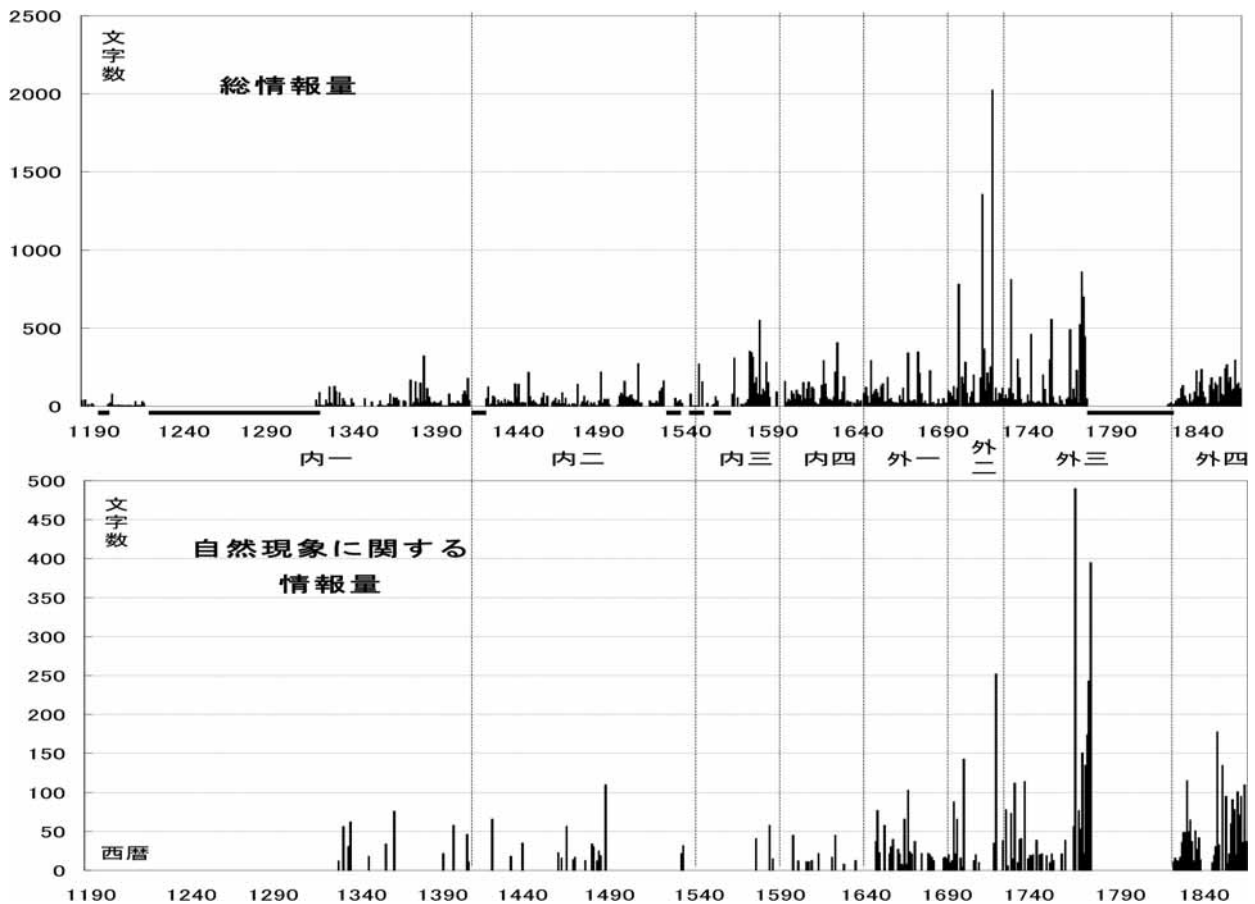


図2 『大平年代記』の総情報量, 自然現象記録件数, 自然現象に関する情報量の時間変化. 上図の横軸の下のバーは, 目立った記録欠落期を示す. 各巻(内一など)の収録範囲毎に期間を縦線で区切った.

図3には、全体の記述に占める自然現象記述の割合の時間変化を示した。四冊之内一～内四に相当する前半期の469年間(1184～1652年)と、外二に相当する25年間(1711～1736年)は自然現象記述の占める割合が4.5～11.4%と低く、外一に相当する58年間(1652～1710年)と外三・外四に相当する136年間(1736～1871年)はその割合が21.5～38.7%と高いことがわかる。

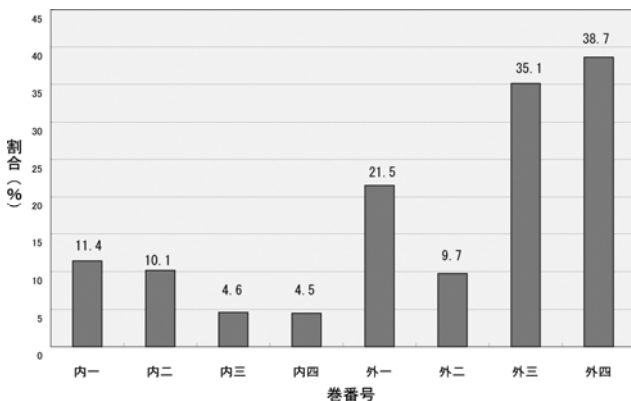


図3 総情報量に占める自然現象の情報量の割合。各巻別に示した。

自然現象記録の内訳については、水害が最も多く(件数の24%、字数の26%)、天候・早ばつ・豊作などがそれに続き、地震・噴火関連記述(候補も含む)は件数で5%、字数で11%と少ない(図4)。水害記述が多いのは、大平地区が狩野川に隣接する地理的状况のためとみられる。

表2 『大平年代記』に含まれる地震・噴火関連記述(候補も含む)。

記録年	文字数	種類	該当する地震・噴火
1 応永九年(1402)	27	地震	丹那断層地震?
2 寛永十年(1633)	8	地震	寛永小田原地震
3 寛文二年(1662)	37	日色異常	なし
4 宝永四年(1707)	141	噴火	富士山宝永噴火
5 明和六年(1769)	56	日色異常	なし
6 明和七年(1770)	55	赤気	なし
7 安永六年(1777)	60	月色異常	伊豆大島安永噴火?
8 安永八年(1779)	37	震動	伊豆大島安永噴火?
9 安永八年(1779)	104	降灰	伊豆大島安永噴火?
10 嘉永七年(安政元年)(1854)	176	地震	安政東海地震
11 安政二年(1855)	101	地震関連	安政東海地震関連
12 安政四年(1857)	45	地震関連	安政東海地震関連
	計	847	

§5. 地震・噴火関連記述

表2は『大平年代記』に含まれる地震・噴火関連記述(候補も含む)の記録年(和暦・西暦)、文字数、種類、文字数をまとめたものである。記録は全部で12件(847字)あり、内訳は地震3件、噴火1件、震動1件、

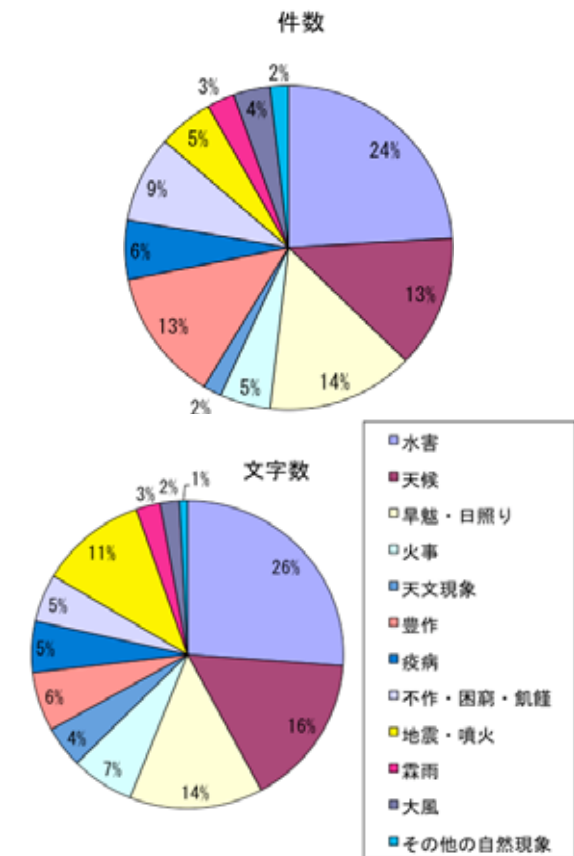


図4 自然現象記録の内訳。件数と字数によって示した。凡例の並ぶ順序は、水害(件数・字数とも最大)から始まる円グラフの時計回りの順序と等しい。

降灰1件、日色異常2件、月色異常1件、赤気1件、地震後の復旧関連記事2件である。1402年地震(四冊之内一に収録)と1633年地震(四冊之内四に収録)以外の10件は、すべて後半期(四冊之外一～外四)に収録されている。付表に、これら12件の全記述を年代順に抜き出した。以下では、これらの記述を、静岡県東部とその周辺における既知の地震・噴火履歴と比較・検討する。

(1) 応永九年(1402)地震

応永九年地震は、その発生時期に関して「其冬」とあるだけで発生日についての詳しい情報はない。記録によると、この地震で地割れが起き、その箇所を「ない割れ」と名づけたとある。付表には含めていないが、この「ない割れ」については応永十二年、十三年にも以下の記述が見られる。

「同十二年乙酉、なひ割之久保を發シ、作を仕付ル」

「同十三年丙戌年、此所を大窪異名す」

これによると応永九年地震でできた「ない割れ」は、後に大窪と改名されたことがわかる。

萩原ほか(1989)は、トレンチ調査(丹那断層発掘調査研究グループ, 1984)によって判明した丹那断層の過去9回の地震のうちのイベントC(841年伊豆国地震)とイベントA(1930年北伊豆地震)の間にあるイベントBが、この応永九年地震に対比される可能性を指摘した。

宇佐美(2003)による1930年北伊豆地震の家屋被害率分布に大平地区のものは示されていないが、南に隣接した江間地区に被害率3割強、北隣の徳倉地区に被害率2割の場所があることから、丹那断層を震源とする地震発生時には大平地区内でも震度6~7程度の揺れに襲われた場所があり、狩野川沿いの沖積低地ということも考慮すれば、地盤の液状化にともなう地割れが発生したとしても不自然ではない。

つじ(1985)は、明治期の地図に「大久保」という小字名があることを指摘し、現地の畦に地割れの痕跡とおぼしき段差を認めたとしている。確かに1958年狩野川台風災害後になされた河川改修以前の地図には、現在の狩野川に接して小字名「大久保」が付された領域がある。しかし、元禄五(1692)年作とされる『駿州駿河郡大平村絵図』(沼津市史別編絵図集, 2006年刊)の該当箇所には、小字名や窪地とおぼしき地形は描かれていない。念のため現地調査をおこなったが、つじ(1985)の指摘した場所に段差は確認できなかった。そもそもこの地域は狩野川の氾濫による水害の常襲地帯であり、河道の近隣低地に600年も前の(おそらく液状化にともなう)地割れが現在も残されていると考えるのは困難である。

以上のことから、つじ(1985)の認めた段差は応永九年地震による地割れとは認めがたく、近代以降の小字「大久保」の起源が地震後の「大窪」と同一であるかどうか不明であるが、丹那断層を応永九年地震の起震断層候補のひとつと考えて矛盾はないだろう。

(2)寛永十年(1633)地震

「同(寛永)十年...此年小田原大地震」とある地震は、1633年3月1日(寛永十年一月二十一日)に起きた寛永小田原地震に違いない。宇佐美(2003)によれば、この地震のマグニチュードは $7.0 \pm 1/2$ で、揺れは小田原で最も強く、大平地区に近い三島でも地割れや潰家があるとされるが、『大平年代記』では地震発生の記述のみにとどまっている。

(3)寛文二年(1662)日色異常

「同二年壬寅三月六日より十三日迄、夕日の影紅のこ

とく志下坂峠二照り輝候事七八日」とあって、1662年4月24日から5月1日まで、夕焼けの空が紅のように赤かったことがわかる。なお、志下坂(しげさか)峠は、大平村の西にあり、沼津の海岸方面に至る標高170mほどの峠である。なお、この日色異常は他の史料にも記述されており、たとえば『徳川実紀』に「三月六日よりけふ(二十日)迄、日月の光赤く、血色のごとし」とある。

大規模な火山噴火の後に火山灰や硫酸エアロゾルなどの微粒子が成層圏に滞留し、夕焼けの赤味が増す原因となることは、現在ではよく知られた事実である。しかし、群馬大学早川由紀夫研究室の日本の噴火カタログ(<http://gunma.zamurai.jp/database/>)や、米国スミソニアン博物館の世界の噴火カタログ(http://www.volcano.si.edu/world/find_eruptions.cfm)に、この日色異常に対応するような噴火は見当たらない。季節から考えれば、黄砂が原因の日色異常とみるのが自然だろう。

(4)宝永四年(1707)噴火

「同四年丁亥十一月廿三日之夜九ツ時より何となしに天地震動候、山も崩ル計二雷電之響渡ルことく家ゆるかし、草木をなひかし、人も立居行歩茂難相成、家に居ル事ならず、皆々外二小屋を掛ケ住居をなす事四五日」とあって、1707年12月16日(宝永四年十一月二十三日)の夜半から天地が震動し、家や草木を揺らしたため、住民が不安を感じて野外に仮住居をつくったことがわかるが、具体的な被害記述はない。この直後に「富士山半腹より焼出し候見付候」とあることから、この震動は1707年12月16日に始まって16日間にわたった富士山宝永噴火に相当することが明らかである。

宝永噴火の開始当初は、長野県南部から千葉県北部に至る広い範囲で爆発的噴火にともなう空振や鳴動とおぼしき現象が記録されている(小山, 2009)。『大平年代記』においても「地震」ではなく「天地震動」と表現されていることから、空振や鳴動の記録とみるのが自然である。

しかし、宝永噴火が始まったのは午前10時頃であり(小山, 2009)、その日の15時半頃までの噴出率が最大、つまりもっとも爆発的であったから(宮地・小山, 2006)、夜九ツ時になって初めて噴火に気づいたとは考えにくい。「夜九ツ」は「昼九ツ」の書き誤りではないだろうか。

(5)明和六年(1769)日色異常

「同六年己丑年三月八日、夕焼黄金之色二而、暮六ツ時二八草木の色金色二相成、地之色共二成ル、又四月廿

日ニ茂又同ク色ニ相成申候」とあって、1769年4月14日と5月25日に夕焼けの色が異常であったことがわかる。この事件も、上記1662年日色異常と同じく、日本や世界の火山噴火カタログに該当しそうな噴火は見当たらない。やはり季節から考えれば、黄砂が原因の日色異常とみるのが自然だろう。

(6) 明和七年(1770) 赤気

「(閏六月)同廿八日之夜、暮会より子丑ノ方ニ四ツ時より空甚ク赤、四ツ半時二者地より火柱之様ニ日足共可言ツ、何筋共なく空江吹登り候」とあり、1770年9月17日の暮頃から夜に至るまで北北東の空が異常に赤く、火柱のようなものが幾筋も空へ吹き上がるように見えたことがわかる。ここで、閏六月二十八日は1770年8月19日にあたるが、同様な現象は閏六月二十八日ではなく七月二十八日夜に起きたことが日本各地の多数の史料に記述されているため、閏六月は七月の誤記と思われる。なお、この現象は東海道原宿(現在の沼津市原)でも記録されている(小山, 2007)。

大崎(1994)は、この現象を赤気に分類し、「明和七年七月二十八日の極光は日本で見た極光の記録のうち最も著しいもの」と断定している。日本の広い範囲での記録の存在から、本論も、この現象を火山噴火によるものではなく、オーロラ(極光)と考える。

(7) 安永六年(1777) 月色異常

「同十月十六日之夜、四ツ半時二月笠輪ちかへの如くなりて、その色鉛のこくにして二重三重ニ成ル、五色に見へて九ツ時二くもりてしれず」とあって、1777年11月15日に月の暈の見え方が異常(輪違: 輪が重なるようなさま)であったことがわかる。この事件は何らかの大気圏内の異常と考えられるが、季節から考えて黄砂が原因ではなさそうである。日本や世界の火山噴火カタログに、大気圏内に大量のエアロゾルを注入しそうな大噴火は見当たらない。唯一該当しそうな近隣の火山噴火としては、次項で詳述する伊豆大島安永噴火(1777-1792)がある。

(8) 安永八年(1779) 震動・降灰

「安永八己亥年...同二月廿九日より震動候、昼夜不止、三月五日迄、六日二ハ一日止ミ候、又七日より初り候」とあり、1779年4月15日から震動が昼夜やまずに少なくとも1週間は続いたことがわかる。また、「同十月...三日、四ツ時迄土雨降り、九ツ時分二止ミ、夜二入降り候て四日之朝八草之葉、木の葉迄も白く、薄霜之ふりしことく、

畑八はいをまきしことく相成而見ルニ、うすき鼠色之土なり、むかし慶長頃ニふりしことあり、又宝永ニもありしと評判とりしなり」とあって、1779年11月10日にかなりの降灰があったことがわかる。

昼夜やまない震動という記述から、近隣の火山噴火か群発地震が考えやすいが、同時期の地震史料や噴火史料の中に直接該当しそうなものは見当たらない。また、同じ年に降灰があったことは、火山噴火を類推させるものである。黄砂の可能性もあるが、草木を白くするほどの黄砂は通常静岡県では経験できないものであり、その後の「むかし慶長頃ニふりしことあり、又宝永ニもありしと評判とりしなり」という記述は、それが珍しい現象であったことを裏付けている。なお、前述の1707年富士山宝永噴火では沼津市内で降灰があったことが知られているから(小山, 2009)、「宝永ニもありし」という記述は、まさにそのことを述べているのだろう。

これら同じ年に起きた震動・降灰の原因として現時点で唯一の候補は、伊豆大島火山の安永噴火(1777-1792)である。安永噴火の推移を再検討した津久井(2008)によれば、安永噴火は第I期(安永六年七月二十九日(1777/8/31)~)、第II期(安永七年三月十七日(1778/4/14)~)、第III期(安永七年八月下旬(1778/10月中旬)~)、降灰期(天明三年十一月二日(1783/11/25)~寛政四年(1792)秋)の4つの時期に分けられる。このうち1779年の噴火記述は知られていないが、伊豆大島の噴火記録自体が断片的なものであるため、伊豆半島北部にまで震動や降灰が及んだ事件があったとしてもおかしくないだろう。

(9) 嘉永七(安政元年)年(1854) 地震と安政二年(1855)・安政四年(1857)の関連記事

「嘉永七甲寅年十一月四日朝四ツ時分与り古来稀成大地震...」と記述された地震が、1854年12月23日(嘉永七 安政元年十一月四日)の安政東海地震に該当することは間違いない。宇佐美(2003)によれば、この地震のマグニチュードは8.4で、被害の最もひどかったのは沼津から伊勢湾にかけての海岸地域である。沼津城内の住居は残らず潰れ、三島宿では家潰986軒など、大平地区に近い地域でも多大な被害があった。『大平年代記』にも具体的な被害のことが数多く記されており、大平地区も多大な被害にみまわれたことがわかる。

また、この後の安政二年(1855)および安政四年(1857)の記録については、どちらの記述中にも「右地震ニ付」とあり、嘉永七年(安政元年)の安政東海地震

の被害とその復旧工事に関連した記録とわかる。

§6.まとめ

1. 『大平年代記』は、総記録年数 688 年(うち 211 年分は欠落)、総文字数 39530 字(年平均字数 57.5 字/年)の史料であり、情報量は前半期の 469 年間(1184 ~ 1652 年)に少なく(35.1 字/年)、後半期 219 年間(1652 ~ 1871 年)に多い(105.2 字/年)。

2. 全記録の 18%にあたる 7186 字(209 件、平均 34.4 字/件)の自然現象記録が含まれる。それらは前半期に少なく(45 件 1317 字)、後半期に多い(164 件 5869 字)。自然現象記述の全体に占める割合は、前半期が低く(字数で 8%)、後半期が高い(字数で 25%)。

3. 自然現象記録の内訳は、水害が最も多く(件数の 24%、字数の 26%)、天候・早ばつ・豊作などがそれに続き、地震・噴火関連記述(候補も含む)は件数で 5%、字数で 11%と少ない。

4. 地震・噴火関連記述(候補も含む)は全部で 12 件(847 字)あり、内訳は地震 3 件、噴火 1 件、震動 1 件、降灰 1 件、日色異常 2 件(おそらく噴火ではなく、黄砂が原因)、月色異常 1 件、赤気 1 件(他史料との比較でオーロラの記録と判断)、地震後の復旧関連記事 2 件である。これらの中には 1707 年富士山宝永噴火と 1854 年安政東海地震に関する具体的な記述が含まれる。

5. 上記 12 件のうち、応永九年(1402)地震と、安永八年(1779)震動・降灰記事については、既存の地震・噴火史料集に該当しそうな事件が確認できず、『大平年代記』の独自記録と考えられる。1402 年地震については丹那断層の活動(1930 年北伊豆地震と 841 年伊豆国地震の間にあるイベント B)、1779 年震動については 1777 年から数年間にわたった伊豆大島安永噴火中の一事件である可能性が判明した。

謝辞

沼津市文化財センターの池谷信之さんには、大平地区の絵図や地図についての教示を頂きました。

また、匿名査読者には貴重なコメントを頂きました。以上の方々に深く感謝いたします。

対象地震・噴火：1402 年北伊豆(?)地震、1633 年寛永小田原地震、1707 年富士山宝永噴火、1779 年伊豆大島噴火(?)、1854 年安政東海地震

文献

- 萩原尊禮・藤田和夫・山本武夫・松田時彦・大長昭雄、1989、続古地震 実像と虚像、338-343、東大出版会。
- 早川由紀夫・小山真人・前嶋美紀、2005、史料に書かれた日付の西暦換算と表記法、月刊地球、27、848-852。
- 小山真人、1999、日本の史料地震学研究の問題点と展望 次世代の地震史研究に向けて、地学雑誌、108、346-369。
- 小山真人、2007、富士山の歴史噴火総覧、荒牧重雄・藤井敏嗣・中田節也・宮地直道編、富士火山、山梨県環境科学研究所、119-136。
- 小山真人、2009、富士山噴火と防災-宝永の富士山噴火-、古今書院(印刷中)。
- 小山真人・早川由紀夫、1996、伊豆大島火山カルデラ形成以降の噴火史。地学雑誌、105、133-162。
- 久保田富、2005、大平年代記の世界、沼津市史編さん委員会・沼津市教育委員会編、沼津市史通史編(原始・古代・中世)、沼津市、561-584。
- 宮地直道・小山真人、2007、富士火山 1707 年噴火(宝永噴火)についての最近の研究成果、荒牧重雄・藤井敏嗣・中田節也・宮地直道編、富士火山、山梨県環境科学研究所、339-348。
- 生島佳代子・小山真人、1999、飛鳥～平安時代前期の自然災害記録媒体としての六国史の解析 概要および月別情報量一覧、歴史地震、no.15、1-23。
- 生島佳代子・小山真人、2006、自然現象記録媒体としての中世史料『吾妻鏡』の特性分析、歴史地震、no.21、111-120。
- 大崎正次、1994、近世日本天文史料、原書房、620p。
- 田中敏貴・小山真人、2000、近世初期の自然災害記録媒体としての『当代記』の特性分析、歴史地震、no.16、156-162。
- 丹那断層発掘調査研究グループ、1984、丹那断層・名賀地区トレンチ調査、月刊地球、6、146-154。
- つじよしのぶ、1985、沼津市大平の「ない割れ久保」について、地震学会講演予稿集、no.1、273。
- 津久井雅志、2008、江戸時代の公文記録(江川文書、大島差出帳)にみる伊豆大島安永噴火(1777 to 1792)の噴火現象、避難計画、復興支援について、日本地球惑星科学連合 2008 年大会予稿集、V151-002。
- 宇佐美龍夫、2003、最新版日本被害地震総覧 [416]-2001、東大出版会、605p。

付表 『大平年代記』に含まれる地震・噴火関連記述(候補も含む)。

1. 応永九年(1402)地震

「同九年壬午年、...其冬地震二而畠割レ其口十間斗り、此所をなひ割レと異名セリ」

2. 寛永十年(1633)地震

「同十年癸酉年...此年小田原大地震」

3. 寛文二年(1662)日色異常

「同二年壬寅三月六日より十三日迄、夕日の影紅のこく志下坂峠二照り輝候事七八日」

4. 宝永四年(1707)噴火

「同四年丁亥十一月廿三日之夜九ツ時より何となしに天地震動候、山も崩ル計二雷電之響渡ルこく家ゆるかし、草木をなひかし、人も立居行歩茂難相成、家に居ル事ならず、皆々外二小屋を掛ケ住居をなす事四五日、後二人々富士山半腹より焼出し候を見付候より少々落付、廿九日二至而漸々焼しまり候、此時関八州石砂降ル、前代未聞事二候」

5. 明和六年(1769)日色異常

「同六年己丑年三月八日、夕焼黄金之色二而、暮六ツ時二八草木の色金色二相成、地之色共二成ル、又四月廿日二茂又同ク色二相成申候」

6. 明和七年(1770)赤気

「同廿八日之夜、暮会より子丑ノ方二四ツ時より空甚ク赤、四ツ半時二者地より火柱之様二日足共可言ツ、何筋共なく空江吹登り候」

7. 安永六年(1777)月色異常

「同十月十六日之夜、四ツ半時二月笠輪ちかへの如くなりて、その色鉛のこくにして二重三重二成ル、五色に見へて九ツ時二くもりてしれす」

8. 安永八年(1779)震動

「安永八己亥年...同二月廿九日より震動候、昼夜不止、三月五日迄、六日二八一日止ミ候、又七日より初り候」

9. 安永八年(1779)降灰

「同十月...三日、四ツ時迄土雨降り、九ツ時分二止ミ、夜二入降り候て四日之朝八草之葉、木の葉迄も白く、薄霜之ふりしこく、畑八はいをまきしこく相成而見ル二、うすき鼠色之土なり、むかし慶長頃二ふりしことあり、又宝永二もありしと評判とりしなり」

10. 嘉永七(安政元)年(1854)地震

「嘉永七甲寅年十一月四日朝四ツ時分与り古来稀成大地震二而一同十方二暮、山崩地割等致所々山々より大岩崩落当惑いたし、夫より十日斗之間毎夜竹藪住居致、然共日々天気続二而よし、蟹釣場大松木古住より公儀迄書上ケ二相成候松震下ケ、大正免石出し杯其儘川中江押し、郷中山称通り田地、居屋敷杯押し其儘押し、中二八家半分位押し候も有之誠二難儀二候、夫より二三年之間間々震下候ハ、仕舞与申儀も不分」

11. 安政二年(1855)地震関連記事

「右地震二付川除其外割所、欠所多く、無扨御普請御願二罷出候処、五給様惣代として牧野様、稲葉様、諏訪様より御三人御役被遊所々御見分被下、五給様御高割二而金貳百六拾五両御下ケ二相成、村方よりも余程足金二而繕ひ普請出来二成」

12. 安政四年(1857)地震関連記事

「同四丁巳年右地震二付鷲頭山本社拝殿共不残皆潰二相成得共、所々之事故延引二相成、当十月与り普請二取掛り申候」